

Paul Auster の *The Music of Chance* における偶然性の様々な解釈

佐藤直子

Paul Auster の小説 *The Music of Chance* (1990) は、タイトルにあるように「偶然 (“chance”)」が作品のプロットを運ぶ中心的要素となっている。物語は、30 年以上音信不通だった父から「青天の霹靂 (“out of the blue”)」のごとく 20 万ドルもの遺産を相続した主人公 Jim Nashe が、仕事を辞め、家族と別れ、家財を売り払い、車で一人アメリカ中を疾走する場面から始まる。あてどない旅を続けるナッシュだったが、だんだんと金が底をついていく。再び大金を手に入れるべく、ナッシュは偶然道で出会ったポーカーの名手、Jack Pozzi とともに賭けポーカーに向かう。勝負の相手は宝くじで大当たりしたという大富豪の Flower と Stone。鬱蒼としたペンシルヴァニアの林に包まれた彼らの大邸宅でナッシュは賭けポーカーに挑み、ポッツィに 1 万ドルを賭ける。しかしポッツィは負け続け、ナッシュは 1 万ドルをすり、担保にした愛車も失い、さらには 1 万ドルの借金をフラワーとストーンに負ってしまう。ナッシュとポッツィは借金返済のため、フラワーとストーンの広大な敷地内にある牧草地でひたすら石を積み上げ巨大な壁を作る、という奇妙な労働に従わされる。牧草地は有刺鉄線で囲われており、フラワーとストーンの手下の Calvin Murks が常にナッシュとポッツィを監視している。しだいに二人はこの監禁状態から逃れられなくなっていく。

物語前半の予測不可能な偶然に満ち溢れた世界は、物語後半、いかなる偶然の余地も残されていないような、いっさいの自由を奪われた監禁

状態へと一転する。このシフトが起こるのが、物語の中心に位置するポーカーゲームである。本稿ではポーカーの勝敗に対する登場人物たちの態度をそれぞれ考察することで、この作品で展開される偶然性の様々な解釈を、西洋思想史における偶然性の概念の変遷とともに追っていきたい。

I. Jack Pozzi の偶然性の捉え方

古代、偶然は万物を司る神の意思の表れ、神聖なるお告げと見做されていた。現代、商業的ギャンブルで使用されるサイコロやカードは古代の予言の儀式で使用された道具にその起源を持つ (Reith 44)。「勝負事と儀式のあいだに形式的な違いはなかった (“there is no formal difference between play and ritual”)]」のである (Huizinga 10)。偶然の出来事は予言の儀式において神聖なる神からのメッセージや、神聖なる高次の意味を媒介するものとして捉えられていた。ギリシャ悲劇は、人間の力ではどうすることもできない運命によって翻弄される人々の絶望を主題としている。古代ギリシャにおいて世界の秩序とは神々のみが把握しうるものであり、人間にはその秩序は見えないものとされていた。でたらめに起こるように見える偶然の出来事は、人間には理解できない、高次の秩序の顕現と見做されたのである。よってストア学派は、世界に生起する一切の出来事は神の摂理としての必然性に従っているとする運命論、決定論を唱えた。この「すべては必然的に起こる」と考える世界観のなかでは、偶然がそれ自身の発現を肯定的に捉えられることはなかったという (Reith 13)。

偶然の出来事に対するポッツィの態度はこのような古代の思想に近い。彼は自分がポーカーに勝つときの感覚をナッシュに対して以下のように説明する。

“Once your luck starts to roll, there’s not a damn thing that can stop it. It’s like the whole world suddenly falls into place. You’re kind of outside your body, and for the rest of the night you sit there watching yourself perform miracles. It doesn’t really have anything to do with you anymore. It’s out of your control, and as long as you don’t think about it too much, you can’t make a mistake.” (136-7)

ポッツィにとってポーカーに勝つことは、自分のコントロールを超えた見えない高次の秩序に自身が調和したときに起こる「奇跡 (“miracles”）」である。フラワーとストーンにポーカーで負けたのは、ゲームの最中にナッシュが席を立ったせいだと彼はいう—“It was you. You broke the rhythm, and after that everything went haywire.” (137)。実際ナッシュが部屋に戻ったとき、それまでポッツィが有利だったゲームの形勢はみごとに逆転していた。ナッシュがその間に、ストーンの製作する模型「世界の街 (“the City of the World”）」からフラワーとストーンを模った人形を盗んでいたことを知ったポッツィは「おまえは宇宙をいじったんだ (“You tampered with the universe”）」と言い、激しくナッシュを非難する (138)。ポッツィにとってそのような行いは「罪を犯し、根本的な掟を破るようなこと (“It’s like committing a sin to do a thing like that, it’s like violating a fundamental law.”)」なのだ (138)。ナッシュの行いのせいで調和が乱れ、試合に負けたのだとポッツィは信じている (137)。

Tim Woods が指摘するように、ポッツィは人間の理性や支配を超えた高次の働きを信じており、人間は見えない運命によって導かれていると考えている (Woods 156)。このような世界観を抱くポッツィにとってはゲームの勝敗もまた必然がもたらす帰結である。ポーカーの勝敗における出来事の偶然性は、人間は見えない超越的な存在によって支配されているとする運命論に組みしかれてしまう。

II. Flower と Stone の偶然性の捉え方

中世に入っても人間の運命はすべて神により予定されているとしたキリスト教的信仰により、偶然は神的秩序の表れとされた (Reith 19)。中世の神学的フレームワークを脱却し偶然をそれ自身において研究の対象とする動きは、17世紀半ばの蓋然論 (probability theory) の出現を待たねばならない。蓋然論の発展に伴い偶然はしだいに運命や神から切り離され、科学的な研究対象となっていく。しかし18世紀、すべての出来事には原因があるに違いないゆえ世界の秩序は理性によって把握しうると考えた「理性の時代」において、偶然の存在を認めることは今度は人間の無知の容認である、として忌避されてしまう (Kavanagh 164)。啓蒙主義思想の合理論において、因果的に説明不可能な偶然の出来事はその存在を否定されてしまうのだ。

フラワーとストーンの偶然性の捉え方は、すべての事象には理性的に把握しうる秩序が存在するとする啓蒙主義的な合理論に近い。彼らの思想はストーンの作る模型「世界の街 (“the City of the World”）」に表れている。フラワーは模型を誇らしげに説明する。

“Look at the Hall of Justice, the Library, the Bank, and the Prison. Willie calls them the Four Realms of Togetherness, and each one plays a vital role in maintaining the harmony of the city. If you look at the Prison, you’ll see that all the prisoners are working happily at various tasks, that they all have smiles on their faces. That’s because they’re glad they’ve been punished for their crimes, and now they’re learning how to recover the goodness within them through hard work . . . Evil still exists, but the powers who rule over the city have figured out how to transform that evil back into good.” (80)

ここに見られるのは人間の叡智によって完璧に統制された世界である。権力が市民を監視し、監獄が悪人を矯正する。このモデルは世界を支配することへの彼らの欲望の表れであり、Bernd Herzogenrath が指摘するように、フラワーとストーンは自分たちを理性によって世界を思うがままに制御する「完璧な支配者 (“perfect masters”）」と見做しているのである (Herzogenrath 189)。

宝くじで大金を当てたフラワーとストーンはその後も投資で大儲けをし続け、「幸運は自分たちに訪れ続け、何をやってもうまくいき、自分たちはまるで神に選ばれし者のような気がする」と語る (75)。宝くじを当ててから今日まで唯一ツキに見放されたのは、かつて一度ポツツイにポーカーで負けたときだけだといい、今日の再戦に備えてプロによるポーカーの指導を受けたことを隠そうともしない (76)。ポーカーの勝敗という偶然が絡む事態であっても、人間の理性によって完璧にコントロールできると彼らは信じているのだ。いかなる偶然も、自分たちをこの世の勝者と決めてかかる彼らの決定論的世界観からは駆逐されてしまう。

Ⅲ. Nashe の偶然性の捉え方

18 世紀、啓蒙主義思想の時代において蓋然論は偶然性を科学的対象として扱うことに寄与したが、それは抽象的、一般的な現実を把握する方法にすぎず、個別の特定の事象の発生を捉えることはできなかった (Kavanagh 15)。古典的な蓋然論者のテーマは神などの高次の意思を表す、意味のある規則性と秩序だったが、18 世紀から 19 世紀にかけてこのような決定論に変化が訪れる。Laplace は統計学を用いて神や人間の自由意志にも左右されない、規則的で法則的な社会的事象を解明しようとした (Reith 34)。Laplace にとっての決定論はいかなる神意の存在も示さないものであり、19 世紀、初めて偶然は世俗的、客観的な観察の対象と

して考察されることとなる。

そして20世紀、特に物理学の分野において非決定論が支配的な原理となる。Newtonの機械的な確実性のモデルは、Heisenbergによる不確定性原理の発見により不確実性のモデルに取って替わられる。それまで知の追求は「確実性」の追及であったが、いまや「不確実性」が理論的考察の対象となったのだ(Reith 42)。経済構造においても、投機事業の台頭によりAnthony Giddensが“To live in the universe of high modernity is to live in an environment of chance and risk.”と示すように(Giddens 109)、リスクの計算自体がその基盤となる「リスク社会」が到来する。Susan Strangeは、「西洋的金融システムは急速にそれ自体が広大なカジノの様相を呈しつつある」と指摘する(Strange 1)。

ナッシュは出来事に先立って予測することも、事後的に解釈することもできない偶然の不確実性を認めているようである。彼は偶然の出来事に「それが起きた」という事実以外のいかなる意味も措定しようとはしない。ポーカーに負けたことに何らかの原因を見出し、因果的説明を与えようとするポッツィの態度をナッシュは激しく批判する。

“You want to believe in some hidden purpose. You’re trying to persuade yourself there’s a reason for what happens in the world. I don’t care what you call it - God or luck or harmony - it all comes down to the same bullshit. It’s a way of avoiding the facts, of refusing to look at how things really work.” (139)

偶然の出来事に「隠された目的(“hidden purpose”)」を認めるポッツィの態度をナッシュは徹底的に退ける。高次の秩序体系によって偶然を理由付けしようとすることは、ナッシュにとって出来事の実在性を退け、物事が真にどう動いているのを見ないための口実に過ぎない。

物語の前半、車でアメリカ中を放浪していたナッシュは、道中での

数々の出会いをたまたまの、「偶然の出会い」として認識している。各地を転々とするなか彼はかつての知り合い Fiona と再会するが、その出会いは「その年ナッシュの身に起きた大半の出来事と同じように、まったくの偶然によって起きた (“like most of the things that happened to him that year, it came about purely by chance.”)」という (14)。結局 Fiona とも別れまたあてどない旅に戻ると、今度は道路の真ん中に倒れていたポツツイに遭遇する。ナッシュはポツツイとの出会いを、「それは誰にも覚えのある、何もないところから不意に生じるように思えるたまたまの出会いだった。風に折られて、忽然と足元に落ちてくる小枝 (“It was one of those random, accidental encounters that seem to materialize out of thin air - a twig that breaks off in the wind and suddenly lands at your feet.”)」と形容している (1)。ナッシュは旅での人々との出会いを何の因果的理由もない、たまたまの出会いと認識しているのだ。

ある日ハイウェイで車を走らせながら、ナッシュは自分が道を間違えて思っていた方向とは逆方向に向かっていることに気づく。

He had told them he was planning to go back to Massachusetts, but as it happened, he soon found himself traveling in the opposite direction. That was because he missed the ramp to the freeway - a common enough mistake - but instead of driving the extra twenty miles that would have put him back on course, he impulsively went up the next ramp, knowing full well that he had just committed himself to the wrong road. It was a sudden, unpremeditated decision, but in the brief time that elapsed between the two ramps, Nashe understood that there was no difference, that both ramps were finally the same. (6)

ナッシュはたまたま道を間違えたのであり、この間違いは偶然的なものである。その間違いの偶然性を享受するが如く、ナッシュは道を修正

することなく車をそのまま走らせる。Ilana Shilohは、自分がどんな選択をしようとも大差はないのだというこのナッシュの理解は、偶然をこの世の根源的な原理として認めようとする彼の意志を反映するものであると指摘する (Shiloh 162-3)。ナッシュはこの世に生起する偶然の出来事を受け入れ、予測のつかない事態に身を委ねていくのである。

Ⅲ-i. 偶然性と自由

しかしこの場面で重要なのは、ナッシュが神意や合理といったいかなる因果的法則によっても説明できないものとして偶然性の存在を認めているがゆえに、自分が直面する偶然の事態をどんなことでも起こりうるのだ、という「自由 (“freedom”）」として解釈することである—“It was a dizzying prospect - to imagine all that freedom, to understand how little it mattered what choice he made. He could go anywhere he wanted, he could do anything he felt like doing, and not a single person in the world would care.”

(6)。偶然の出来事はその発生の根拠が説明不可能であると認識しているがゆえに、ナッシュはそこに自分の行動を決定しそれに対する責任を負うこと免れ得る「自由」を見出すのである。彼は次第に「自由と無責任 (“freedom and irresponsibility”）」の虜になっていく (11)。自由を求めてナッシュは偶然の出来事に自分の身を任せていく。

ナッシュの偶然と自由の同一視は、しかしながら、矛盾を孕むものと言える。偶然ある出来事に遭遇した者はその出来事が生起した原因・理由に対して責任はないかもしれないが、偶然の出来事が現実にかきた場合、それは個々人の生の営みの中で絶対的な必然性へと化し、その者を否が応でもある不可避な状況へと巻き込むからである。偶然の出来事はその発生の原因・理由が不明であるがゆえに、それに遭遇した者からその出来事に対するコントロールを奪ってしまう。自由を欲して偶然に身を任せたナッシュは、偶然のもたらす不可避な事態のなかで逆に自由を

失っていってしまう—“Nashe realized that he was no longer in control of himself, that he had fallen into the grip of some baffling, overpowering force.” (6-7)。

そもそもナッシュが自由気ままな旅を始めたのは、30年以上も音信不通だった父の死によって「青天の霹靂 (“out of the blue”）」のごとく巨額の遺産を手にしたからだった (2)。お金が彼の自由を保障していた。もらった遺産を一気に使い果たそうとするかのようにナッシュはアメリカ中を車で駆け巡る。

He was like a crazed animal, careening blindly from one nowhere to the next, but no matter how many resolutions he made to stop, he could not bring himself to do it. Every morning he would go to sleep telling himself that he had had enough, that there would be no more of it, and every afternoon he would wake up with the same desire, the same irresistible urge to crawl back into the car. (7)

「自由と無責任 (“freedom and irresponsibility”）」を謳歌する旅をナッシュは止めることができない。「抑えがたい衝動 (“irresistible urge”）」によって彼は毎日車に引き戻されてしまう。そうこうしているうちに無尽蔵にあるように思われた遺産はしだいに底をついていき、ナッシュはあるパラドックスに気づく。

Slowly but surely, the adventure was turning into a paradox. The money was responsible for his freedom, but each time he used it to buy another portion of that freedom, he was denying himself an equal portion of it as well. (17)

お金を使えば使うほど彼の自由は狭められていることをナッシュは知

る。「じきに何か起きないことには、金が尽きるまで旅を続けてしまおうだろう (“if something did not happen soon, he was going to keep on driving until the money ran out.”)」と感じたナッシュは競馬場に行き大穴を狙うが、結局お金をすってしまう (19)。窮地に追い込まれたナッシュの目の前に現れたのが、ポッツィだった。

Ⅲ-ii. 偶然性とリスク

道に倒れていた見知らぬ男ポッツィを車に乗せたナッシュは、彼がポーカーの名手であり、大金を賭けたポーカーの勝負をひかえていることを知る。再び大金を手にし自由を取り戻すことを夢見たナッシュは、ポッツィに1万ドルを賭けることを決意する。

The money was the only thing that mattered, and if this foul-mouthed kid could get it for him, then Nashe was willing to risk everything to see that it happened. It was a crazy scheme, perhaps, but the risk was a motivation in itself, a leap of blind faith that would prove he was finally ready for anything that might happen to him. (36)

見知らぬ男に大金を賭けるというリスクを、ナッシュは「何がわが身に起ころうと、いまや自分はそれを受け入れることができる」ことを証明するものとして甘受する。

危険を好むナッシュの性癖は旅の始まりから垣間見られる。ハイウェイでの車の運転に伴う事故や死の危険性を、ナッシュは自分の人生を自分で引き受けている感覚をもたらすものとして一番に求める—“They added an element of risk to what he was doing, and more than anything else, that was what he was looking for: to feel that he had taken his life into his own hands.” (12-3)。ポッツィが賭けポーカーでフラワーとストーンに負け

そうになると、「こうした危機こそ自分がずっと追い求めていたもの
 ようだった (“as if it were precisely this sort of crisis that he had been
 searching for all along.”)」という (98)。結局ポッツィは勝負に完全に負
 け、ナッシュは掛け金1万ドルを失うが、すると今度は自分の車を担保
 にして勝負を続けさせてくれと要求する。それでもポッツィは負ける。
 金も車も失ったナッシュは、ついにはカードを引いて出た目の数の大き
 さで勝負しようと言い出す。勝ったらナッシュは車を返してもらい、負
 けたら1万ドルの借金をフラワーとストーンに負うことで合意しナッシ
 ュはカードを引くが、出たのはダイヤの4、フラワーの引いたハートの
 7にも勝てなかった。

このようにナッシュの求めるリスクの大きさはどんどん増大してい
 く。ポーカーの場合、ある程度プレイヤーの技術が勝負を左右する。し
 かしトランプのカードをランダムに引くとなると、その結果は全くの偶
 然によるものである。何が起るか分からない危険な賭けを極限にまで
 押し進めることで、ナッシュは逆説的に「自分の人生を自分で引き受け
 ている感覚」を味わう。フラワーとストーンに1万ドルの借金を負うこ
 ともなってもナッシュは自分がこのような事態を予期していたとして、
 自分自身を完全にコントロールしている気分にさえなる (106-7)。

いくつかの先行研究は、このようなナッシュの態度から彼を理性的な
 人間であると分析している。Woods は、ナッシュはすべてが理性的に捉
 えられると考えていると指摘し (Woods 156)、また Herzogenrath も、ナ
 ッシュは偶然を偶然として見做すことができない、偶然をコントロール
 しようとする理性主義者であると論じている (Herzogenrath 183)。

しかし果たして彼はそれほど理性的な人間だろうか。多くの場合、ナ
 ッシュの行動は理性よりも「抑えきれない衝動 (“irresistible urge”)」に
 よって決定されている (7)。あまり注意深く考えずにナッシュは新車を
 購入し (3-4)、ハイウェイで道を間違えたときは「衝動的に
 (“impulsively”)」そのまま車を走らせる (6)。道に倒れているポッツィ

を発見したときは、自分で自分が何をしているのか自覚しないままその見知らぬ男を車に乗せる(20)。ポーカーの最中密かに模型からフラワーとストーンの人形を盗んだときも、ナッシュは「なぜそんなことをしたのか、自分でもよくわからなかったが、理由などどうでもよかった。ちゃんと言葉にできなくても、この行為が絶対に必要なものだったことははっきりわかった。自分の名前がわかっているのと同じくらいはっきりわかった(“He was not sure why he had done it, but the last thing he was looking for just then was a reason. Even if he could not articulate it to himself, he knew that it had been absolutely necessary.”)」という(97)。

ナッシュの無軌道に見える行いの数々は一般的に了解可能な理性に基づいてはおらず、自身の内的必然性のようなものに支えられている。あえて常軌を逸した行動を取ることで彼は極限状態に自分を追い込むリスクを喜んで負い、「物事が真にどう動いているのかを見極め」ようとするのだ(139)。「自分の人生を自分で引き受けている感覚」を得るためにナッシュは数々の危険な賭けをするのだが、そんな彼を待ち受けているのは皮肉にもすべての自由を奪われた、逃れようのない監禁状態である。

III-iii. 偶然性と運命

ポーカーに負け1万ドルの借金を負ったナッシュとポッツィは、フラワーとストーンに命ぜられるがまま巨大な壁を作る労働を課せられる。このとき注目すべきなのは、ナッシュがこの命令を意外にもすんなり受け入れることである—「決定権が自分の手から奪われたこと、走るのもこれでついにおしまいなのだと思うことが、ほとんど安堵ですらあった。壁は罰というより、むしろひとつの治療だった。現世に復帰するための片道の旅だった(“It was almost a relief to have the decision taken out of his hands, to know that he had finally stopped running. The wall would not be a

punishment so much as a cure, a one-way journey back to earth.”) (110)。「自分の人生を自らの手中に収めている感覚 (“to feel that he had taken his life into his own hands.”)」を求めて車でハイウェイを疾走していた男は (13)、いつしか「決定権が自分の手から奪われること (“to have the decision taken out of his hands”)」を求めるようになる (110)。しかしこの時点でナッシュは壁作りを「罰」というより、「自由と無責任 (“freedom and irresponsibility”)」を謳歌した自分への「治療」と認識しており、この労働の辛苦を「自分の向こう見ずさと自己憐憫を贖う道 (“a way to atone for his recklessness and self-pity”)」として歓迎すらしている (127)。すべての自由を奪われた拘束状態をナッシュは現世への再生の道として受け入れているのだ—「あと三十日で何もかも終わる、ナッシュはそう自分に言い聞かせた。俺だってそれくらい乗り切れないんじゃ、人間としてどうしようもないじゃないか? (“It would all be over in thirty days, he told himself, and if he couldn’t manage to see it through until then, what kind of a man was he?”)」 (135)。

しかしナッシュが人間的な生活に戻ることはない。ある日、監視役のマークスが銃を所持して来たときナッシュはそのことを痛感する。

Freedom, therefore, had never been an issue. Contracts, handshakes, goodwill - none of that had meant a thing. All along, Nashe and Pozzi had been working under the treat of violence, and it was only because they had chosen to cooperate with Murks that he had left them alone. (144)

行儀よく労働に従事しているかぎり牧草地での生活は平和な様相を呈してはいるが、いったん反抗的な態度を彼らがとると、根底に潜む暴力が姿を現すのである。彼らに許された自由など最初からなかったのだということを、ナッシュは思い知らされる。

借金返済まであと1週間に迫ったある日、ナッシュとポッツィは相談

してさらに2、3日仕事を延長することを決めるが、奇妙にもフラワーとストーンはこの決定を予め知っていたかのようにマークスに追加条項を持たせてくる。

They hadn't even come to a decision until last night, and yet here were the results of that decision already waiting for them, boiled down into the precise language of contracts. How was that possible? It was as if Flower and Stone had been able to read their thoughts, as if they had known what they would do before they knew it themselves. (151)

暴力による脅しによって外的な自由が奪われているばかりでなく、内的な思考の自由さえもが奪われているような、奇妙な感覚をナッシュは味わう。ナッシュが牧草地での労働に従事し始めてからフラワーとストーンは一度もその姿を現さないが、彼らはいたるところで見えない力を使用しており、まさに全知の神としてナッシュの生を操っているようなのだ。

しだいに、ナッシュは自分がストーンの作る模型の一部となって自由自在に操られている、という思いにとらわれていく。

Sometimes, powerless to stop himself, he even went so far as to imagine that he was already living inside the model. Flower and Stone would look down on him then, and he would suddenly be able to see himself through their eyes - as if he were no larger than a thumb, a little gray mouse darting back and forth in his cage. (178)

懲罰による脅しの気配が漂うストーンの模型「世界の街 (“the City of the World”)」は架空の街の再現ではなく、いま現にナッシュの置かれた状況に他ならない。逃亡を図ったポッツィが見せしめの如く瀕死の状態で

発見されたとき、ナッシュは自分の置かれた状況がまさに監獄、一切の自由の奪われた監禁状態であることを悟る。牧草地での労働は懲罰だったのであり、もはや模型がナッシュの生を再現しているのか、ナッシュが模型の世界を再現しているのか見分けがつかなくなる。

不意に舞い込んだ父の遺産、ポッツィとのたまたまの出会い、ポーカーゲームでの惨敗、すべては数々の偶然の帰結にすぎないはずが、ナッシュはいまやすべてが予め決定されていたかのような、運命論的世界観に支配されてしまう。あらゆる出来事の背後には何らかの隠された意図があるように思われるとき、そこには偶然の存在する余地はない。

IV. *The Music of Chance* における偶然性

偶然の出来事に対する登場人物たちの態度を通してこの作品は「偶然(“chance”）」への様々な解釈を提示する。ポーカーの勝敗における偶然性を、ポッツィは高次の秩序の表れと見做し、フラワーとストーンは理性的に操作できる対象として駆逐する。ナッシュは当初、出来事に先立って予測することも事後的に解釈することもできない偶然の存在を認めていたが、物語の後半、いかなる自由も奪われた監禁状態のなかで、すべてはフラワーとストーンの計略によって仕組まれていたのだという認識から免れ得なくなる。

この認識の転換は、初期作品 *The New York Trilogy* (1987) の主人公たちに起こる認識の転換とは逆向きの様相を呈している。*City of Glass* (1985) においてにせの探偵としてある事件の解決に乗り出す Quinn は、犯人とされる Stillman を尾行し、事件を捜査するが、Stillman はある日忽然と姿を消してしまう。事件の真相解明に頓挫した Quinn は “Everything had been reduced to chance, a nightmare of numbers and probabilities.” (*City of Glass* 141) といい、すべては偶然にすぎず、事件などそもそも存在しなかったのではないかという疑念にかられる。失踪

した友人 Fanshawe を探す *The Locked Room* (1986) の語り手は、捜索に頓挫し、たまたまバーにいた男を Fanshawe だと決めつける—“He was an arbitrary choice, totally innocent and blank. But that was the thing that thrilled me - the randomness of it, the vertigo of pure chance.” (*The New York Trilogy* 351)。初期作品の主人公たちが最終的にこの世の不条理性 (absurdity) としての偶然性を認めざるを得なくなるのとは反対に、ナッシュは偶然に思われた出来事の背後には仕組まれた意図があったのではないかという認識へと向かう。

物語の終盤、久々に車のハンドルを握ることを許されたナッシュは、突然前方から対向車が迫ってくることに気づく。マークスを後部座席に乗せたまま、ナッシュがブレーキのかわりにアクセルを思い切り踏みこむところで物語は終わる (216-7)。自身の生に対するあらゆる自由を奪われた男は最後の偶然 (chance) に賭けるのだが、そこには死しか残されていないだろう。偶然なる事故もまた、人間にとって究極的に不可避で必然な「死」をもたらしてしまう。*The Music of Chance* はナッシュの生き様を通して、偶然起きた出来事もこの世に生きる人間の生の中でいったんそれが現実化すれば、避けようのない必然的な帰結をもたらすのである、という人間のドラマを表わしているのである。

引用文献

- Auster, Paul. *City of Glass*. New York: Penguin, 1987.
- . *The Music of Chance*. New York: Penguin, 1991. (『偶然の音楽』柴田元幸訳. 新潮文庫, 1998年.)
- . *The New York Trilogy: City of Glass, Ghosts, The Locked Room*. New York: Penguin, 1990.
- Giddens, Anthony. *Modernity and Self-Identity: Self and Society in the Late Modern Age*. Cambridge: Polity Press, 1991.
- Herzogenrath, Bernd. *An Art of Desire: Reading Paul Auster*. Amsterdam: Rodopi, 1999.
- Huizinga, Johan. *Homo Ludens*. London: Routledge and Kegan Paul, 1949.
- Kavanagh, Thomas M. *Enlightenment and the Shadows of Chance: The Novel and the Culture of Gambling in Eighteenth-Century France*. Baltimore: The Johns Hopkins UP, 1993.
- Reith, Gerda. *The Age of Chance: Gambling in Western Culture*. New York: Routledge, 2002.

Shiloh, Ilana. *Paul Auster and Postmodern Quest: On the Road to Nowhere*. New York: Peter Lang, 2002.

Strange, Susan. *Casino Capitalism*. Oxford: Blackwell, 1986.

Woods, Tim. "The Music of Chance: Aleatorical (Dis)harmonies Within 'The City of the World.'" *Beyond the Red Notebook: Essays on Paul Auster*. Ed. Dennis Barone. Philadelphia: U of Pennsylvania P, 1995. 143-61.